

3) 石子原出土の旧石器について

芹沢 長介

昭和47年6月18日、私は石子原遺跡の発掘現場をはじめて訪れ、それまでに出土していた167点の資料も実見することもできた。そして、さらに9月13日にも、ふたたび現地の調査状況を見学する機会をあたえられた。また、私の研究室で前期旧石器を専攻している岡村道雄君は、第二次調査のさい、約一ヶ月半にわたって発掘と整理の作業に参加し、出土資料の詳細な研究を完成させることができた。そこで、私の短い期間の観察と、その後の岡村君による詳しい分析とを総合して、石子原出土石器についての概観を記してみることにする。

第一にとりあげる必要があるのは、これら石子原出土資料が人工か自然石かという問題であろう。何故このような初歩的なことをわざわざ持ち出すかといえば、たとえばソヴィエトからマンモスの家の展覧会のためにはるばる来日した、イワン・ショフコプリヤス氏のように、これらを非人工品すなわち自然石とみなす人々も現に存在するからである。なお、森島稔(1972)によれば、ショフコプリヤス氏は日本でごく一般的な安山岩製の石器についても、同様に識別することができず自然石だと主張したので、同席した若い研究者たちも呵然としたということであった。しかし、日本の研究者の中にも、同じような考えかたをする人が絶無とはいえないので、あえてこの問題に触れておくことにしよう。石子原から出土した資料は、これを材料の面からみれば、チャート、スレート、カンラン岩の河原石から成っている。チャートとスレートの礫はほとんどすべてが打ち割られ剥片となっているのに反して、カンラン岩は礫のままの形でのこされ、しかもその一部には敲打の痕跡がみとめられる。したがって、カンラン岩の礫はハンマーであり、チャートのスレートの破片には大部分にバルブやフィッシャーがみられるので、ハンマーによって打ち割られた石器の素材だということになる。ローム層のなかにまとまった形でこれらの礫や剥片が存在すること自体すでに不自然であって、それだけでもすでに天竜川の河床から遺跡まで運んできた人間の介入を推定する充分の根拠たりうるであろう。しかもこれらの資料は、ハンマーと剥片という石器製作を明示する構成を示しているのであって、これらを非人工品なりと主張する一部の人の考えかたがどうしても私には理解できないのである。なおこれ以上の詳しい分析については、岡村君の執筆した本文を参照願いたい。

第二の問題は、石子原出土資料を考古学的にみたとき、それらは如何なる性格をもっているかという点である。岡村君の整理した結果によると、大部分は剥片石器であって、礫核石器はきわめてすくない。前者と後者の比率は30対7であり、すなわち81%対19%となっている。また、器種としては剥片尖頭器、スクレイパー、ノッチ、使用痕ある剥片、チョパー、チョピング・トゥール、両面加工石器などであって、典型的なナイフの存在はみとめられない。このような組成のなかで最も特徴的なのは六点の剥片尖頭器であって、これは中国でいう斜軸尖頭器に相当する。斜軸尖頭器の出土例は、日本で確実な例として早水台最下層、岩宿ゼロ文化層のほか、山形県上屋地および同県庚申山から知られているが、この石子原出土例は素材とする剥片のとり方からみて、やはり後者の上屋地や庚申山のものに近いと考えられる。また、八点の出土をみたチョパー、チョピング・トゥールは、加工方法において早水台最下層のものに類似してい

るので、この点も注意する必要がある。はなはだ簡略な記述ではあるが、以上の特徴から判断すれば、石子原の石器は日本の前期旧石器のなかでは、むしろ後出のものではないかということになる。典型的なナイフを欠くことからみれば、ナイフ出現以前であり、斜軸尖頭器を特徴とする文化にふくめられるのではあるまいか。

第三は石器の年代決定にさいして基準をあたえる地質学上の位置についてである。この問題にかんしては、第一次調査らい松島信幸氏が鋭意分析を続けてきているので、詳細は本文を参照戴くことにする。はじめは古期ロームにまでさかのぼるともいわれていたが、この報告の原稿執筆の段階では、信州ロームのなかの新时期ローム下部に対比されるのではないかという考えに落ちついたようである。この遺跡は残念ながら良好な鍵層に恵まれていないために、最終的な決定はまだ後日にのこされるのではないと思われるが、もしも石器の出土層準が新时期ローム下部にあるとするなら、関東ローム層に対比した場合には武蔵野ローム上位ということになるであろう。しかし武蔵野ローム中からは、関東地方でもまだ良好な資料が発掘されていないのであって、すべて今後の研究にかかっているといえる。近時進展した関東ローム層のC-14法およびフィッシュン・トラック法による年代測定を参考にするなら、武蔵野ロームの堆積年代は約三万年から七万年のあいだにあると考えてよい。この時期は、ユーラシア大陸でネアンデルタール人が活躍した中期旧石器時代であり、また中国では丁村文化がほぼこれに相当するといわれている。日本でも将来、中期旧石器時代という区分が確立する可能性はあるが、現在では三万年以上前の石器を一括して、前期旧石器時代のなかを含めておくのが妥当であろう。したがって石子原の資料は、日本の前期旧石器文化のなかでもより後出のものであり、強いて大陸の石器文化に対比しようとするなら、それは中期石器時代の所産に近縁のものと推定したいのである。

稿を了えるにあたり、貴重な出土資料を検討する機会を与えて下さった恩師大沢和夫先生および、神村透氏に深甚の謝意を表したいと思う。